

宜野湾高校の生徒達へ（79）

2021.2.5

「会社に入るか。社会を創るか」。今年4月武蔵野大学に日本で初めて誕生する「アントレプレナーシップ学部」が、受験生に送るキャッチフレーズだ(朝日新聞:12/12)。アントレプレナーシップは、**起業家精神**と訳される。この精神を体現した人物である**社会起業家の田口一成さん(39)**の記事が目にとまった。内容が、皆さんが取り組んでいる「総合的な探究の時間(総探)」とも関連すると思ったからだ(朝日新聞:12/12 より一部引用)。

田口さんの**原点**は、大学2年の時、**貧困に苦しむアフリカの子どもたち**の映像を見たことだ。

「ものすごいショックを受けて。人生のテーマを見つけました」。世界から貧困をなくそう。支援団体を回り「**ダイナミックで継続的な活動にはお金が必要**」と聞く。ならばお金で活動を支えよう、と決めた。米国留学から帰国後、「勉強して3年でやめる」と面接で公言して商社に入り、猛烈に働いた。



実際には2年で退職。不動産関連で起業し、売上げの1%を寄付すると決めたが、1年休みなしで働いて、もうけは3千万円。

30万円の寄付に、「これでは**成果が小さすぎる**」。

そんな時、

日本に住む外国人から「部屋を借りられない」と聞き、ひらめく。「外国人と日本人がともに住む**シェアハウス**をつくれれば異文化交流ができる」。人気を呼び、気づいた。「**事業はお金を稼ぐだけじゃない。社会課題も解決できる**」。ソーシャルビジネスとの出会いだった。

田口氏は起業家に必要なことについて次のように語っている。

起業家に何よりも必要なことは「**覚悟**」。人生を懸けて**本気でやる気があるのか**。みんな可能性があり、それを引き出せるかどうか。能力の問題じゃない。ビジネスプランはいくらでもつくれます。

これまで、宜野湾高校の総探で話しに来てくれた人たち・MASAさん・知念臣吾さんは、皆、「**本気**」で、「**覚悟**」を持っていたような気がする。

シェアハウスやバングラデシュの工場などを軌道に乗せると、起業家の育成に軸足を移す。

「自分でやったら、一つの起業が回り始めるまで1年かかる。30年やっても30社。それでは遅すぎる。起業家を育成すればいい」

「世の中には**小さな課題がたくさんある**。

そんな課題を解決する**地域起業家が次々に生まれる社会**にしたい」。



田口氏の挑戦は続いている。

事業でお金を稼ぎつつ、社会課題の解決を目指すソーシャルビジネス。その起業を支援する。資金を出し、ビジネスプランなどを助言して黒字化まで伴走。起業を教える「**アカデミー**」も開講した。

皆さんが取り組んでいる「**総探**」と上で紹介した**ソーシャルビジネスとの関連**を考えてみよう。皆さんは総探で自分の興味関心を地域やSDGsに関連させたテーマを設定し、テーマの解決に取り組んだ。その提案はおそらく、**利潤を生み出すビジネスの視点**が弱いだろう。ソーシャルビジネスでは、ビジネスとして成立するためには**利潤を生み出すことが必要**となる。そのためにビジネスプランを作成しなければならない。しかし、総探は**起業家育成が目的**ではない。プランを作成する中で、**社会のしくみをより切実に学ぶことが重要**なのだ。

現在、**終身雇用制**が崩れつつある。転職が当たり前の時代になった時や「**社会を創る**」ときに必要になるのが、**総探で培った力**だ。その力とは、「**自ら課題を見つけ、課題解決に取り組む力**」。総探にしっかり取り組むことが、皆さんの将来につながる。

沖縄県立宜野湾高等学校長 津留一郎